

グリム童話の奇妙な話— 「コルベスさま」(KHM 41) を読む

95K007 深 海 裕 一

グリム童話集の中には、一般的にメルヘンといわれてイメージするようなお話もあるが（例えば「星の銀貨」(KHM 153)）、それとは逆に、「これで、みんな死んでしまいました」というハッピーエンドとは程遠い終わりを迎えてしまうお話（例えば「めんどりの死んだ話」(KHM 80)）もある。その中で私が特に気に入っている非常に奇妙キテレツなお話、「コルベスさま」(KHM 41) を見てみることにする。

まずこの「コルベスさま」は、いかにもメルヘンらしく「むかし昔、あるところに牡鶏と牝鶏がいました」と始まる。こののどかな出だしから、このお話が最終的には「コルベスさま殺害」へと進んでいくなど、この時点では到底想像できないだろう。

このテキストの中には、コルベスさまなる人物がいったい何者なのか、どうして殺されなければならないのかは最後まで分らない。ただ、テキストの最後に「コルベスさまというかたは、よくよく悪い人だったにちがいありませんね」という記述があるだけだが、実はこの一文、第三版（1837年）を出版する際に、グリム兄弟の弟ヴィルヘルム・グリムにより書き加えられたものである。これだけひどい目にあうのだから、きっと悪い人だったのだろう、という訳なのだろうが、これはいかにも「取って付けた」結末と思われて仕方ない。

いずれにせよ、前半には何の変哲もないのんびりした、牧歌的な雰囲気さえ漂っているだけに、後半散々痛めつけられた挙句にとどめの石臼をくらうコルベスさまへの暴力が、また一段と際立っていると見えよう。

では次に、この「コルベスさま」に登場する動物や道具たちについて詳しく見てみることにする。

まず物語の冒頭、鶏夫妻がねずみたちに車を引かせる場面は、愉快である反面、漠とした不安を予感させてもいる。あらゆるものを食べ尽くしていくねずみは、荒廃のシンボルでもあるからである。大変臆病で、「裏切者」の意さえ持つねずみが、「コルベスさま」後半では一切出てこないことも、この延長で考えるならよく理解できる。

石臼はその重たさ、硬さから罰や殉教を表わす。旧約聖書「ヨブ記」（第41章24節）では、神の造ったワニの「冷酷な心」の比喩として用いられている。また、イエスは「マタイ伝」（第18章6節）で「わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人に益になる」と言っている。

石はキリストの使徒たちを表す一方で、また、手軽な復讐の道具としても用いられたようだ。有名な「赤ずきん」(KHM 26) においては、「大きな石ころをいくつもいくつもすばしっこくもってきて、みんなでそれを狼のおなかのなかへ詰めこんで」狼を殺してしまったし、「^{びくしん}柏楨の話」(KHM 47) でも、息子の首をちょんぎってしまった意地の悪い継母は、最後に石臼で殺されている。

牡鶏は、悪霊を追い払うものであると同時に、悪魔そのものであるという二律背反的イメー

ジを持つ。悪魔とみなせば、当然神と対立するものであり、この場合コルベスさまは可愛想な悪の犠牲者である。だが逆に、牡鶏を闇の力や悪霊を追い払うものとみなせば、本当に悪い人であったコルベスさまは退治されてしまったと考えられ、弟ヴィルヘルムが最後に付け加えたあの取って付けたような一行は意味を持ってくる。

牝鶏は死と関連する鳥であり、これは「めんどりの死んだ話」において、牡鶏に内緒でくるみを一人占めして喉につまらせて死んだ牝鶏の葬儀の際に、登場してきた者全員が、「これで、みんな死んでしまったわけです」となってしまう理由もわかってくる。マイナスのイメージで見ると、「悪魔」を意味する牡鶏と、「死」の牝鶏とがコルベスさまの「梁の上」で見下ろしていたのだから、既に彼はどうすることも出来なかったのである。

それでは、卵と鴨の表わすものとは何か。

そもそもこの卵は、鴨のものなのかそれとも鶏が産んだものなのかよく分らない。しかし卵には、復活祭のモチーフになることから、新しい生命が蘇ってくるという意味で、復活と卵のイメージはピッタリ符合する。鴨は気楽さを表わし、物語全体の平和的雰囲気の一役買っている。この鳥のしたことといえば、コルベスさまの顔に「ぼしゃりっ」と水を掛けただけである。タオルにくるまっていた卵の方が、「くしゃりとつぶれて、目へべったりと貼りついた」だけ、コルベスさまにはタチの悪いものであったであろう。しかし、ここまでではどうということもなく、コルベスさまはまだ我慢することができていたが、小さな暴力も積もり積もれば破壊的な大きなエネルギーに成長していくことがあり得るのだと、この作品はブラックユーモアを湛えながら教えている。

そして、その次に出てくるのが留針と縫針である。ここで針が突き刺さるのは、何かしらの警告ではないだろうか。留針が表しているのは「抑制せよ」という警告だと考えられる。実際、留針は衣類その他を留めるものであることから、「抑制を表わすもの」である。つまり、コルベスさまは留針に刺された段階で、一度じっくり時間をかけて考えてみるべきではなかったのか。時間は人間を冷静にさせ、その結果色々な知恵を授けてくれるものである。この時彼がもし少しでも考える時間を持っていたなら、彼は災害から免れたかもしれない。

ここでもう一度テキストを振り返ってみる。

先に述べたように、そもそもコルベスさまが一体何者なのか、そして鶏たちは何の目的で彼の家に行こうとしていたのか、テキストは一切触れていない。ここで敢えて仮説を述べるなら、まず猫が初めに現れて話が進んでいくところからみると、ひょっとして主役はこの猫なのではないだろうか。つまりコルベスさま殺しは全て猫が仕組んだことなのである。

コルベスさまの家に着いた後、ねずみが消えてしまうのは、さっさと猫が食べてしまったと考えるなら納得がいくし、二羽の鶏たちは梁の上に避難して無事、鴨は水桶の中にいるので、水が苦手な猫には手が出せない。後に残るのは猫にとってはもう食べられないものばかりである。そしてコルベスさまが帰宅した時、まず初めに引き金を引くのも猫で、油断しているコルベスさまにしたたか灰をぶっつけ、こうしていじめの（殺害計画の）口火が切られる。

猫がコルベスさまに対して何か相当に深い恨みを持っていたとみるなら、「コルベスさま」は実に巧妙な復讐の物語といえるのではないだろうか。

ところでこの「コルベスさま」は「ブレーメンの音楽隊」(KHM 27)と似ている。「ブレーメン」でも、動物たちが家の中に隠れて、泥棒たちに襲いかかる。だが、「ブレーメン」の動物たちは、ロバもイヌもネコもオンドリも、厄介払いになったり殺されそうになっていた、い

わば「失業者」であり、攻撃の対象は泥棒という明らかなる悪玉である。しかし、「コルベスさま」に登場する動物たちは別に弱者でもないし、コルベスさまはテキスト内においては悪人とは判断し難い。

また同じように、「コルベスさま」は「猿蟹合戦」にも最後の展開が非常に似ている。だが、「猿蟹合戦」の場合は「仇討ち」という大義名分がある。それに対して、コルベスさま襲撃には何の理由もない。暴力のための暴力という感じである。そのため、このお話は何とも不気味な感じがするのである。

だが考えてみると、「ブレーメン」や「猿蟹合戦」の襲撃シーンにも、こうした「暴力のための暴力」が持つ快感が潜んでいるような気がする。それを、仇討ちとか泥棒退治という大義名分で覆い隠しているのではないかとも見える。そう考えるならば、「コルベスさま」はそうした要素のみを取り出したものなのかもしれない。

実際、子供というのはこういう話を結構喜んで聞くものである。子供に限らずとも「○さんが×さんを殺す、犯す、呪う」などという話題は、私を含め大人も理不尽なと思いつつも、ついつい聞きたくなる。このように、性的表現（特に婚前交渉や妊娠、近親相姦など）には神経を尖らせていたグリム兄弟が、暴力や刑罰の表現に対して寛容であったのも、このような人間の興味を考慮してのことだったかもしれない。

そして、この「コルベスさま」の穏やかな前半部分には、わらべうたのような詩が入っており、原文で読むときれいに韻を踏んでいる。このわらべうたは、のどかな雰囲気をやが上にも強調する役割を果たしている。

わらべうたとは少々異なるかもしれないが、宮崎駿原作「となりのトトロ」にも、「真黒ク ロスケ出ておいで／出ないと目玉をほじくるぞ」というフレーズが主人公の二人によって歌われる場面があるが、このフレーズも、一度聴いたら忘れられない。

このように、わらべうた風のフレーズがもり込まれているお話は、いかにも人伝えに広がってきたような雰囲気を持っており、実際には多くのお話しの出所を口伝え以外に頼っていたグリム童話集を、そのように感じさせないようにする役割りを、この「コルベスさま」は果たしているように思えるのである。

参考文献

- 鈴木 晶『グリム童話 メルヘンの深層』講談社、1991年
金成陽一『グリム童話のなかの怖い話』大和書房、1994年